夢を売る商人

冒野綾子作品選集 6

桃源社

〈検印省略〉

曾野綾子作品選集 6

夢を売る商人　　定価 八五〇円

著者　曾野綾子

昭和五十年一月二十日　印刷

昭和五十年一月二十五日　発行

発行者　矢貴東司

印刷所　太平印刷社

発行所　東京都中央区日本橋蠣殻町一丁目

十二番地　　株式会社　桃源社

(分) 0093 (製) 274006 (出) 5180

1975 ©

曾野綾子作品選集

夢を売る商人・目次

夢を売る商人 7
長い暗い冬 89
炎上 101
飼育のたのしみ 115
真砂まんじゅう 130
卵とベーコンの朝食 146

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二人静　164
人間の皮　179
地球のかぐわしい部分　199
山の湯　233
羽織　247
解説　鶴羽伸子　265

装幀　原　弘

曾野綾子作品選集

夢を売る商人

夢を売る商人

第一話　人命救助

早渡次郎が、その詐欺師としての才能を最初にあらわしたのは、実に、小学校三年生の時である。

彼は三鷹の、小作農の次男として生まれた。長兄は兎口で、すぐ下の妹は精薄であり、彼自身は軽いどもりであった。末の妹だけがまともな美しい娘で、彼はこの妹を熱愛していた。

後年、彼に欺された人々は、一様に、彼はどもりで正直そうに見えた、と述べている。どもりの詐欺師というものは確かに世間では珍しいであろう。しかしそれも又、彼はちゃんと計算に入れていたのであった。

早渡兄弟の父はアル中であった。金があってもなくても酒を飲んでいる。早渡次郎の記憶にある限り、母は、まだ三十台の終りごろであったにも拘らず、前歯が一本もなかった。過労と栄養の悪さのために、或る時ぞっくり抜け落ちたまま、義歯を入れる金がなかったのだ。

だから、次郎も学用品を満足に買ってもらえないことや、人並みな弁当をもたせてもらえないことにも、それほど傷つきはしなかった。貧乏には馴れていた。只、十銭ほどの金を一度使ってみたいと思い、その事を考え出すと、奇妙に興奮した。

或る雨の夜、次郎は納屋の壁に、二、三匹のやもりがはりついているのを見つけた。彼は顔を近づけてそのやもりをつくづくと眺めているうちに、不意に自分の体から、魂が抜け出して行くように感じた。

次郎は一瞬、原始の世界に遊んだのだ。学校で中生代のはちゅう類の話をきいたからなのだろうが、彼はその瞬間、剣竜（ステゴザウルス）ががつがつと十二対の背中の骨板を鳴らす音をきき、始祖鳥（アルケオプチリックス）や単角竜（ケラトザウルス）が乾いた声であざ笑うような鳴き方をしたのを耳にした。やもりは、彼の目の前で、実に数百倍の大きさにふくれ上ってみえた。

しかし空想の糸がぱたりとと切れると、やもりは、小さく貧弱に、破れた土壁の上にはりついているだけだった。彼は暗いじめじめした、現実の世界にひき戻された。噛ん

で吐き出し、つばを吐きかけたいほどの、おぞましい単調な現実である。

しかし、そのとたん、彼は別の感情にふるえ上った。性的な衝動にも似ていた。彼はやもりをかき集めるように捕えると、それを空箱の中に閉じこめた。

翌日は学校から帰ると暗くなるまで準備にかかった。板切れは家の周囲にころがっていたが、覗き穴の部分に使うガラスを探すのに、二、三時間もあちこちをうろつかなければならなかった。

三日目に、彼はクラスの中でも、比較的、裕福な家庭から来ている級友に言った。

「鰐の子、見たかっぺ」

「鰐？　どこにいんだよ」

「うちさ。ブラジルの叔父さんがよ。送ってくれたんだけどよ。二銭出すなら見してやら」

相手が当惑したような顔をした時、次郎は自分の計画が当ったことを感じた。

その日、彼は六人の級友をひきつれて家へ帰った。丸一日かかって作ったやもりの小屋は、中に、こわれたかめに水を張って置き、小さなガラスの覗き穴の部分からだけ中が覗けるようになっている。

次郎は最初の子から二銭を受けとると、

「じゃ、見な」

と重々しく見物を許した。連れて来た六人は、サラリーマン、工員、郵便局員、画家、商店などの、小遣いが使えて、しかもやもりなど、あまり見たことがなさそうな連中を集めてある。

最初の一人は、「これが鰐かよ」と首をかしげ、二人目と三人目は「凄えや」と感歎した。すでに六枚の一銭銅貨が、彼の掌の中でぞっとするような重味を持っていた。

四人目と五人目は、「死んでんじゃなかんべな」と疑ったが、次郎は相手にしなかった。

しかし六人目は一目覗きこむやいなや笑い出した。

「何だい、ただのやもりじゃねえかよ」

色めき立つのもあった。

「お前がよ、鰐の子、見たことあっかよ。知りもしねえで、でっけえこと言うな」

次郎は慌てずに言い返した。

「これはアストロオロゾプスという鰐の子なんだぞ。もう少し大きくなったら、背中や尾にとげとげがでてくらあ」

アストロオロゾプス、などというのは、勿論、次郎の口からでまかせである。しかし仲間は、この恐ろしげな長々しい名前を、次郎がどもりどもり言うのを聞くと、おし黙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

って、しまった。そうでないかも知れないが、或いはそうかも知れないし、もしそうとすれば、二銭でそれを見られたというのは、やはり貴重な経験ではないか。

その日、友達を帰してから、早渡次郎は夕焼けの空に向って、呆心したように立っていた。こんなふうなことがあっていいものだろうか。自分の身の上からはぎとり難いと思いこんでいたみじめな現実を、我と我が手で変えるなどということができてもいいものなのだろうか。少年は本当にそう思った。掌に十二枚の銅貨をあつくなる迄、握りしめながら……

二十年近い年月がたった。

只の二十年ではない。

大正十四年の十一月に生まれた男は満洲へ行き、一掴りの遺骨さえも残さなかった。同じ年の十二月の末に生まれた早渡次郎は一月の差で死を免れた。彼は内地の連隊で終戦を迎えた。

落合松平は、自分で自分のことをかなりしあわせな男だと思っていた。

落合は今年四十歳。川崎市P農協の副組合長をしている。体は無類の健康体で、尊敬する人物は二宮尊徳である。

今までに三十七組の縁談をまとめた。生涯に三百組はいけるのではないかと思っている。

趣味は実にひろい。謡曲、歌謡曲、なんでも……つまり喉自慢であった。宴会の席では都々逸をやるのが得意である。

唄う前に箸袋に万年筆で、自作の文句を書いてみせる。

雨の夜更けにしっぽり濡れて
君と落ち合う川の宿

部分に剽窃があっても、都々逸なら御愛嬌というものである。いかにも即興というふうに見せかけてはいるが、実は月に一晩くらいは新作をものするために寝ずに考える。とにかく落合という自分の名をどこかに入れることにしているのだ。

こういうセンスは恐らく選挙の時にも役に立つだろう、と落合松平は思っている。落合は、来年あたり、市議に立つつもりなのだ。

落合は自分の生涯に三つの夢を持っていた。第一が、衆議院にでること、第二が立派な自叙伝を出版して子孫に残すこと、第三は命をかけるほどの情事を楽しむことであった。

彼が最も懸念しているのは第三のことであった。第一と第二は自分が克苦勉励すればどうにかなりそうに思われ

る。しかし第三のことばかりは、相手がないことには実行不可能である。落合は自分の容貌には自信がない。昔風に言えば五尺二寸の小軀である。それで彼はそれが達成されない場合に代用するものをすでに決めていた。

それは、いつか公費で外遊し、どこかの国で白人の娼婦を買うことであった。

その初夏の夜、落合は農協に客を迎えて、会議室でかなりの量のビールをあけた。相手が女の話については、かなり豊富な話題を持ち合わせていたので、彼は自分も真偽とりまぜてベストを尽した。

落合は酒に強い方ではない。気分が愉快であり、笑って、しかも酒の肴があまりなかったので、彼はかなり酔った。脚をとられるほどではなかったが、農協の玄関を出る時、はずみをつけて歩いている自分を感じた。

落合の家は、そこから十分ばかりのところにある。本来なら表通りを歩いて行けばいいのだが、その道は真北に府中の方へ抜ける道に当っているので、狭い舗装道路を時々駐留軍のジープやトラックなどが唸りをあげて走って行く。駐留軍の車にひき殺されたが最後、日本人の命はまことに安く評価されている、ときいているので、彼は用心して裏道を通ることにした。

道の一方の端は多摩川へ注ぐ幅二間ばかりの用水になっている。その向うには有名な多摩川梨の梨畑がひろがっている。

落合はいかにも土地者らしく、梨畑の間を縫って歩いた。もうかなり暗くなって、行手に月がぽっかりとでていた。突然、落合は歩をとめた。畑の中にほの白い顔がみえた。

すかして見た時、酔いのまわった彼の心は、かっと燃えるようになった。まんざら知らない人物ではない。近所の小百合という精薄で唖の娘であった。

「小百合ちゃん。何してるの？」

落合はなれなれしく声をかけた。相手が精薄で何もわからないということが、彼の気持に秘密の楽しみを与えた。娘は十九歳になる。横顔は美しいが、近づくとぷんと臭かった。自分で下着を洗う才覚はなく、親もそこまで手がまわらないのだ。しかし、その匂いも、今日は落合の狂った情欲をかきたてた。

「小百合ちゃん、いい子だねえ」

落合はほころびのあるセーターの下で、むっつりと発育した娘の乳房にふれた。乳房は燃えているように、指先にあたたかく感じられた。

落合は小百合のスカートの上からそろり、そろりと手を動かした。娘は体を固くしてじっとしている。落合はこの思いがけぬ僥倖におののきながら、次の自分の行動のチャ

ンスを心のうちに思いえがいた。
そのとたん、娘は彼の手をふり放して走り出した。あまりのことに呆気にとられている彼の目に、小百合が畑の中を用水の方へ、両手を開きながら、転ぶようにかけて行くのが見え、やがて、どぼんという微かな水音が響いて来た。
「おーい。どうしたあ！」
落合は喚いた。彼はどんよりした用水の縁まで走ると、ちょうど向うから煌々とヘッドライトを見せてやって来る一台のトラックに向って、
「停まれえ！　とびこんだぞ！　人がとびこんだ！」
と叫んだ。それから彼は下駄をぬぎ、服を着たまま用水の中にとびこんだ。
その日は前日まで降り続いた長雨のあとで、用水の水量はかなり多かった。
落合は決して水泳が達者ではなかった。酒を飲んでいるので、心臓が喉許までつき上げて来そうで息ができない。それでももがいていると、一瞬何かやわらかいものにふれた。落合が、必死に身をひるがえした時、のぼりたての月と、ヘッドライトを点けたまま停っている数台の車と、人の呼び声が鮮かに見え聞えた。しかし彼は、それが、自分を救けに来た人たちだとは思わなかった。
落合はそれから三、四回もがいた。最後の一かきで、彼は爪も裂けよとばかり、或る物体をひき寄せようとした。
その時、彼は逆に水底にひっぱられた。それから後のことはもうろうと記憶の底に沈んでいる。彼は投げこまれたロープに、自分ですがり、そればかりでなく、ロープをもっとこちらに寄こせ、というような指示までしたらしい。外人の男がひとり、水の中で彼を手伝ったが、彼はそれを白人だとばかり思いこんでいたのに、後から聞くとそれは府中の米軍キャンプの黒人兵だった。
その晩から翌日にかけては、おそらく落合松平の未だ書かれざる自叙伝にとっても、重大な一日になるであろうことを、彼は自分でも感じていた。彼は座敷に坐っていた。後から後から客があった。新聞記者も来た。カメラのフラッシュが光ると、彼の興奮状態も最高に達した。
農協から祝いの一升壜も届いて来る。
もっとも劇的なのは、息を吹き返した小百合の母親が礼に来た時であった。小百合の家も農業である。
「何のよ」
松平は、軽く言ったまま絶句した。彼は小百合が用水にとびこむ数分前の情景を思い出しているのではなかった。むしろ彼は、純粋にひとりの生命を自分が救けたという事実の偉大さに感動していた。
早渡次郎が、落合松平を訪ねて来たのはそれから数日後

であった。

「読売の早渡ですが」

農協の応接室に待たされていた男は、落合が入って来るのを見ると立ち上って低い声で言い、胸のポケットから名刺を出した。

そこには、「読売新聞社記者・早渡次郎」となっていたが、落合はその一字の小さな違いには気がつかなかった。

「お忙しいところを、お、おじゃまします」

記者は軽くどもりながら挨拶した。

「先日は、うちの社会部の記者がうかがいまして、いろいろお世話になりました」

「そうかね」

落合はさりげなく言ったが、彼は、自分に関するあらゆる新聞記事のスクラップ・ブックを作ったので、読売新聞の記事なども無論、知らないわけはなかった。

「今日は何です？　又、こないだの話かね？」

「はあ、社会部の記事としてはあれで一応目的を達したわけですが、今回は特に米軍の協力もあり、日米親善をたくまずして実行されたという意味で、大変注目すべきできごとだと、思いますので、それについて少しお話をお聞きしたいと、かように考えるわけです」

早渡は、内ポケットからメモ用紙と、読売新聞社と社名の入った緑色の鉛筆をもっさりととり出した。

「全く、今度のことは、実際問題としてだね。これは、私だけだったら、こちらまで溺れてますよ。ところが運よく来かかったのが、軍事教練を受けているアメリカさんだ。これは見ごとなものでした。

小百合のおっ母さんに私は言ってやったんだ。たすかったのは、アメリカががっちりチームワークをくんでね。人工呼吸をしてくれたからだと言ってね」

もう何度も言いなれた科白なので、語調を強める個所までうまく決っていた。

「小百合さんという人は全くの精薄だそうですが」

「正直なところね、これは書いてもらっちゃ困るが、私のところへも、そう言って来た人があった。ああいう子は、無理してたすけんでもよかったんじゃないかと言ってね。あれを機会にカタがつけば、あの子の家にしても諦めがよかったんじゃないかと言う訳だ。

しかしだね。あの時、私にそんな分別がつくかだよ。人が落ちた。これをたすけたらいいか、たすけん方がいいか、と考えるような人間がおるものか、と私は言いたいね。そして結果はどうだ？　おっ母さんが涙流してね、私の前に手をついて礼を言いましたよ。はたさまからごらん

になると、あんなゴクつぶしと思われるかも知らんし、事実何度か、この子さえいなきゃ、と思ったこともあったけど、本当に辛いときに生きる元気を与えてくれてたのはこの子だったということが、今よくわかりました、とこう言ってね。あんた、畳から頭をあげられんほど喜んだ」

早渡は頷きながらメモをとっていたが、顔をあげるとぽつりと言った。

「実は私にも精薄の妹がいたもんですから、ああいう記事を読むとひとごとと思えないんです」

「ほう、そうかね。それで妹さんは？」

「結核で死にました」

早渡次郎は或る点では嘘をつかなかった。アル中の父親は、戦争前から、次第に畑を放棄して、日銭の入る仕事に手を出すようになった。地形、井戸掘、ちょっとうまいような働き口はいくらでもある。間もなくS飛行機に徴用になると、父は百姓の生活をこけくそにけなすようにさえなった。

しかし二十年の春の空襲で、父は待避壕の中で直撃を受け、子供ひとり分にも足りないほどの肉塊になって戻った。母はその棺の上に、配給の酒をかけて、少しも悲しんではいなかった。

早渡一家が、とにかく土地を耕作しつづけていたなら、農地解放になって、彼らもいくらかの土地もちになり、その土地が又宅地に売れる時代もめぐって来て、別の運が向いて来たかも知れないのだ。しかし彼らはどん底の、その中でも低い泥濘の道ばかりをえりにもえって歩いて来たことになる。早渡も小学校をでると、あらゆることをした。まじめに働くのをやめたのはつい最近のことであった。

妹の死んだのは昭和二十二年だった。

「高熱でアイスクリームを食べたがったのに、それさえ、叶えてやれませんでした。僕は大学にいて、やっと、自分が生きているだけだったし、正直言って死んだときいた時は、ほっとしました。しかし、今思うと、やはりアイスクリームを食べさせてから死なさせてやりたかったです。クリームをみると目の色がきらきらして来るんです。今の私なら、アイスクリームぐらいは腹いっぱい食べさせてやれます」

もし自分が大学へ行っていたら、という年代のくり方だけは正確だった。

「そうだろうねえ」

落合はしんみりした口調で言った。

「自分のことになってしまいましたが、ときに、どうして、あの子は落ちたんでしょうか」

落合の体の中で、何か黒く重苦しく不愉快なもの、たと

えばコールタールの釜のようなものが爆発してその内容物がどろどろと流れ出したように感じられた。
「それはよくわからんね。とにかく私が見た時は、小百合が走って行くとこだった。それですぐ、どぼんと落ちた」
汗が吹き出して来た。ことに額にひどかった。
「精薄は自殺しないものですが」
「脚を踏み滑らせたんじゃないか？　そこのところになると、私も夜のことでよくわからんね」
「この事件でお感じになったことを一言伺っておきたいですが」
「まあ、私はかねがね、人間愛というものは実に美しいものだと思っている。それを、みんなが発揮するように、及ばずながら私も努力したいと思ってます」
わかったようなわからないような結論がでると、早渡はぱたりとメモ用紙を敏捷に閉じ、もの馴れた手つきで、鉛筆を胸のポケットに投げこんだ。
「お忙しいところをどうもありがとうございました。掲載料の方は、一万円になっておりますが」
「掲載料がいるのかね」
落合はびっくりして尋ねた。
「こないだ来た記者の人はとらなかったよ」
「あれは社会部だからです。今度は文化部です。そこのところが私たちの仕事の内容をお見せするわけで辛いところなんですが、新聞といえども、経済上、どうしても掲載料を頂く紙面ができて来ましてね。そのへんはうちばかりでなく各社共通の公然のヒミツになってるんじゃないですか。
もっとも内容は実に厳選しまして、うちの社の品位を落すような話題、どんなに金を出していただいても、いかがわしい経歴の方には御遠慮ねがってます。ということはつまりうちの新聞にでて頂いた、という事実があれば、これはもう、その方の人格その他、まちがいないという保証も同然で、仕事の上でも、その方のプラスになる。我が社も得をする、ということに持って行きたいようです」
「わかりました」
落合はしぶしぶ財布をとり出した。
「では、社発行の領収書を置いてまいりますから」
「ごくろうだね。で、いつ記事は新聞にでます？」
「おそらく一週間ぐらい後だろうと思います。出ましたら自動的にお送りすることになります」
「じゃ、今日か今日かと新聞を買いに行かなくていいわけだね」
落合は大きな印のおされた受取りを、財布におさめた。そして彼はわざわざ早渡を、夕陽のあかあかとさしこむ玄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com